

龜淵龜次郎の漢詩について

荒井 一樹

大杉谷村は、石川県の南西部、現在の小松市にあたる場所にかつて存在した村である。しかし大杉谷村に関する資料は、ほぼ残されていない。そのため、この村についての研究はほとんど進められておらず、未だによくわかっていない。今回わたしは、この村で村長を務めていたこともある、龜淵龜次郎（以下：龜次郎）の漢詩を入手することができた。そこでこれらを整理・分析し、そこから読み解くことができることを探っていく。

本研究で取り扱うのは、龜次郎の漢詩という本研究が独自に用意した資料で、まだ誰も手を付けていない。したがって、これに対する先行研究は存在しない。本研究の目的は、龜次郎の漢詩を整理・分析することにより、大杉谷村の歴史解明の一助となることである。

本研究の調査対象は、龜次郎の遺した漢詩群である。今回は、調査対象を冊子に限り、整理・分析した。各冊子に収録されている漢詩の数は、合計すると 2224 首であった。成立時期はおおよそ昭和 19 年から昭和 34 年までの 15 年間であり、龜次郎が 70 歳から 85 歳までの間の期間であった。

調査方法は、それぞれの冊子に対し、漢詩のタイトル、形式、年代などを Excel に目録として採っていく。また、漢詩のタイトルから、内容や誰に送ったかなど、わかる範囲で取得・分析し、まとめる。

龜次郎の漢詩は、五言絶句が 178 首、五言律詩が 22 首、七言絶句が 1988 首、七言律詩が 32 首、四言絶句が 4 首であり、七言絶句が最も多かった。また、年代別や冊子別に見ても、どの年代でも七言絶句が最も多いことがわかった。また、龜次郎の漢詩の中で、特にタイトルに他人の名前が出てくる漢詩に注目し、龜次郎の交友関係を探ると、「天山」や「双石」などの人物が見えてきた。さらに、龜次郎の漢詩のタイトルには、「偶成」や「即事」、「初夏」などの単語が多く登場していることがわかった。

龜次郎が漢詩のやり取りをしていたことから考えると、大杉谷村には、漢詩のやり取りができるような環境があったと考えられる。また、最も多いのは七言絶句であったが、年代によって他の形式が占める割合が高くなっている時期がある。交友関係などと照らし合わせてみたところ、「雌龍会」という漢詩に関係していると思われるグループや、「双石」や「臥牛」などといった存在が浮かび上がってきた。しかし、資料が足りないため、はっきりと決定づけることはできなかった。

今回は龜次郎の漢詩、一種類目のみの分析であったため、偏った情報しか得ることができなかった。そのため、龜次郎とやり取りがあった他の人の資料を調べるのが今後の課題である。

(指導教員 綿拔豊昭)